

## チヨウザメが来遊した石狩川

北海道にチヨウザメが生息していたことがさまざまの文献や地名、アイヌの民話や言い伝えに数多く残されています。「コタン生物記」(更科、1976年)によるとチヨウザメは昔、石狩・十勝・釧路・天塩の河川をはじめ、八雲や鵡川にも生息していたと言われていますが、いまでは見られなくなりました。

一般にチヨウザメはアイヌ語で Yupe (Yupe-be)、ユペとよばれ江別、江部、内大部、湧別等はチヨウザメと関係ある地名と言われ、昔、文化神が熊を獲つて石狩川を舟で運ぶ途中、神居古潭で舟をひっくり返したので、その肉がチヨウザメになつたという伝説があります。また、釧路ではチヨウザメのことをオネ・チエブ(老大魚)とよんでいます。十勝では、カムイ・チエブ(神魚)とかユペ・カムイ・チエブ(チヨウザメの神魚)、ピシ・ゴル・カムイ・チエブ(鉢をもつ神魚)などと言わっていました。

また、旭川市史(1959年)によると、神居古潭における「守護神の熊と鮫」、「鬼とさめの格闘」というアイヌ民話も残っています。このようにチヨウザメに関わるアイヌ語の全流域● 川からの恵み

地名は、石狩川流域に多くみられ、その昔、石狩川にはかなりの量のチヨウザメが生息していましたことが窺えます。また神居古潭より上流ではチヨウザメにまつわる地名が見つかることから、その昔、石狩川でのチヨウザメの分布は神居古潭よりも下流に限られていたものと推測できます。



チヨウザメの剥製

明治に入り、多くの人々が開拓のため、石狩川を遡り内陸に入り込んでいきました。石狩川河口と石狩川の上流を結ぶ舟運も盛んになりましたが、明治に入つてからの石狩川でのチヨウザメの記録がほとんど見られないことから、明治時代にはすでに石狩川でのチヨウザメの出現はさほど多くなかつたものと推定できます。さまざまな話を総合すると、大正末期から昭和初期には石狩川でのチヨウザメは絶滅に近い状況であったと思われます。またチヨウザメ類の減少は、世界中で最も漁獲数の多い、ロシアにおいても同様です。その理由として、海域での乱獲、河川での未成魚の獲りすぎ、河川域での工場等による水質汚濁、ダム工事による水量の減少、河川工事等による産卵場の減少などが推測され、世界的に見ても1900年頃を境にチヨウザメの資源量は激減しました。

このような世界的なチヨウザメ資源の減少は、残念ながら石狩におけるチヨウザメ資源にも影響を及ぼし、来遊量が激減したものと考えられます。加えて石狩川流域に多くの住民が入り込み開発が進むにつれて、河川の水質悪化、水量の減少、川床の変化、河畔林の伐採等により産卵環境の悪化、越冬場の消失などが生じ絶滅に至つたものと推測されます。

## 水と緑のために、

### 私たちができること

#### ●全流域● 川からの恵み

森はさまざまな動植物を守り育て水を生み出します。次の世代に良好な環境を残し、その尊さを伝えるために水と緑を育みます。

従来の緑化技術と大きく異なる生態学的混播法（以降、混播法）は、植栽の対象地にもともとあった植物（在来種）を再生させると、人の手を加えない土壤に、周辺に生育する様々な在来種の種をたくさん集め、直接播いたり、小さな苗木にして植えます。そのことで競争と自然選択が働き、多様な緑が再生し、その地域の特性を持つ生態系が復元するというものです。混播法は91年から実験が行われ確実な成果を上げています。



画期的な考え方とともに、混播法は種の採取から植栽、マルチングまでの行程が簡単で、誰でも出来る点でも優れています。実際参加した住民は、種を集める所から始めるので愛着が沸き、作業が楽なので楽しみながらやつていると言います。

森はさまざまな動植物を守り育て水を生み出します。次の世代に良好な環境を残し、その尊さを伝えるために水と緑を育みます。

従来の緑化技術と大きく異なる生態学的混播法（以降、混播法）は、植栽の対象地にもともとあった植物（在来種）を再生させると、人の手を加えない土壤に、周辺に生育する様々な在来種の種をたくさん集め、直接播いたり、小さな苗木にして植えます。そのことで競争と自然選択が働き、多様な緑が再生し、その地域の特性を持つ生態系が復元するというものです。混播法は91年から実験が行われ確実な成果を上げています。

また札幌の東海大第四高付属中等部では、環境教育の一環として混播法を実施しました。生徒達は予想以上に真剣に取り組み、父母達の評



満開の見ごろとなるにはまだまだ年月が必要な木々もありますが、沼田町などでは、春ともなると住民が雨竜川に桜を観にやって来るそうです。住民達は憩いを求めるど同時に、早く大きくなつてほしいと願つているようでもあります。生長を見守る楽しみも桜づみ事業ならではのものです。

流域住民の緑への関心は非常に高く、植栽の時はまるでお祭りのようにたくさんの住民が集ります。また植栽地を代表して指導する「みどりの里親」を育成するなど、緑と同様人づくりも平行して行っています。これまでモデル植樹は87回を数え、5,175人が参加して、2222・545本が植えられました。

判が良いことから、1学年だけの予定が、2学年も追加実施したほどです。30年後を見届けられる次の世代の参加もあって、緑復古の青写真が見えてきました。

桜づみモデル事業は、堤防の強化を図ることにより、堤防上に桜の高木等を植樹し、河川やその周辺の緑化を推進することを目指す「みどりの里親」を育成するなど、緑的に、建設省が全国で進めてきた事業です。石狩川流域でも、既に桜づみモデル事業を実施している河川が多くあり、春には薄紅色の花びらが舞い落ちる光景も見られつつあります。

モデルに選ばれるのは、自然的、社会的、歴史的環境の中で、桜づみを設け、さらに良い水辺環境を図る必要があり、しかもその地域と住民が水辺の整備や保全に高い熱意を持つていて川です。

満開の見ごろとなるにはまだまだ年月が必要な木々もありますが、沼田町などでは、春ともなると住民が雨竜川に桜を観にやって来るそうです。住民達は憩いを求めるど同時に、早く大きくなつてほしいと願つているようでもあります。生長を見守る楽しみも桜づみ事業ならではのものです。

## 清流をとりもどせ

石狩川支流の牛朱別川は、旭川市の常磐

公園そばの旭橋の下で石狩川と合流しています。この牛朱別川の水が黒ずんできたのは国策パルプが旭川工場の操業を開始した昭和15年ごろからです。

国策パルプは、製紙だけではなく、化学繊維による衣料の原料も生産していました。川が流れていた近辺の農家は、石狩川から灌漑用水を引き、水田を作っていました。

翌年から、稻の生育に異変がおきました。

そこで近隣7つの町村は国策パルプと忠別川に廃液を流していた合同酒精に対し不純物の除去を要求しました。

昭和18年に、道や旭川市の調停で補償協定を結びました。当時はまだ「公害」という言葉もありませんでした。

この「公害」という問題が再燃するのは、太平洋戦争が終わった昭和24年からです。

川に廃液を流しているために、稻の生育が遅れ、収穫も減少し、ミズムシの異常発生も確認されました。

●全流域● 川からの恵み

マスへ影響を与えていることも判明します。石狩川河口地区でのサケの漁獲量が激減しました。

昭和32年に、被害者側は共同で「石狩川水質浄化促進期成会」を結成し、反公害運動に立ち上りました。

翌33年、国会において「公共用海域の水質保全に関する法律」と「工場排水等の規制に関する法律」が可決されました。しかし、中流域の被害にとどまり、河口の石狩湾漁業への影響は取り上げられず、運動の広がりはいまひとつの状態でした。

転機は、昭和37年の米価要求全道農民大会です。この大会で「北海道灌漑用水汚濁防止対策推進本部」が結成され、国策パルプの操業停止を北海道知事に要求、漁業者もこの運動に参加するようになりました。

「あの頃は、どす黒い川になつて、ひどいものだつた。サケは獲れなくなるし、ウグイやワカサギは死んで川に浮いていたもんだ」と、その当時を知る人は言っています。

昭和39年、川の汚染で被害を受けた農家の人々は、北海道知事を相手に訴えを起こしました。原告は空知土地改良区専務をはじめました。



じめ、農家の2,272人が共同訴訟人です。

訴えは札幌地方裁判所に提出され、被告は一級河川・石狩川の管理委任者である北海道知事になります。その後、建設省と通産省が協議して国策パルプ側に「排水净化」の改善命令が出され、知事の国策パルプと原告との補償問題などを調停してこの紛争を解決し、行政訴訟は取り下げられました。

その後、昭和46年に、「公害関連十四法」が国会で成立してから徐々に石狩川の水質が回復していきました。そして、昭和50年ごろからサケの遡上が再び見られるようになりました。原告は空知土地改良区専務をはじめました。

## 石狩川流域の花々

石狩川周辺には、逞しく自生する花、大切に育てられた花、短い季節を謳歌するよう咲く花が水辺に美しく調和します。

雪解けで水かさが増す初春に、我が世の春とばかりに咲き誇る「ミズバショウ」は、サトイモ科の大型多年草で、葉より先に白色肉質の仏炎胞に包まれた黄色の花穂を出します。水辺や湿地では珍しくない野草でしたが、年々数が減っています。石狩河口橋手前、生振築堤などでミズバショウの大群落が見られます。



ミズバショウ



ハマナス

丘陵地「ハマナスの丘公園」が有名です。夏に紅の花を満開にさせ、芳しい香りに包れます。ハマナスのほか、ハマボウフウやエゾスカシユリなどの砂丘海浜植物も多く群生しています。

ユリなどの砂丘海浜植物も多く群生しています。東西4km・南北2kmの湿地に大小100余りの湖沼群が点在しています。一帯には、湿原植物や高山植物が群生し、学術的にも貴重なものです。春先のミズバショウから、夏にはエゾカンゾウ、サワギキヨウ、タチギボウシなど100種類以上が咲き誇る光景は、南暑寒別岳の山々に抱かれ、神々しいほどの美しさです。



石狩川・花文字植栽



雨竜沼湿原

されています。6月上旬から10月末まで樂しませます。

「北の尾瀬」といわれる雨竜沼湿原は、標高850mに広がる珍しい高層湿地帯で、東西4km・南北2kmの湿地に大小100余りの湖沼群が点在しています。一帯には、湿原植物や高山植物が群生し、学術的にも貴重なものです。春先のミズバショウから、夏にはエゾカンゾウ、サワギキヨウ、タチギボウシなど100種類以上が咲き誇る光景は、南暑寒別岳の山々に抱かれ、神々しいほどの美しさです。

雨竜町字尾白利加地先で、石狩川と一般国道275号線が80mくらいの間隔で並列する地点に、ドライバーが思わず目をとめるダイナミックな花文字があります。「いしかり川河口から100キロ」と描かれた花文字は、サルビア、マリーゴールド、ペニチアなど色合いを計算して植えられています。これは滻川河川事務所が、河川愛護と河川事業のイメージアップのために始めたものです。スケールの大きさやアイデアのユニークさがドライバーに大好評で、珍しい花の名所として注目



ジャーマンアイリス広場

飾る花として愛されてきました。

緑化団体が中

心となり、市民ぐるみでジャーマンアイリス広場の除草やゴミ拾いなどを実施しています。

北の短い夏を彩る、芳しき紅の花を咲かせる「ハマナス」は、バラ科の落葉低木で、浜の砂地に生えます。石狩町にある石狩灯台の

幾春別川を遡るサケの旅



海から川へ  
サケは秋になると、  
石狩川河口に集まってきます。



石狩川本流から支流へ  
石狩川を遡り、千歳川合流点を通過して、  
幾春別川を目指します。



育った川へ  
石狩川本流を離れ  
幾春別川に遡ってきます。



床止  
平成3年にサケが見つかったのは、  
魚道が設置されていなかった  
この床止の少し下流でした。



川向頭首工  
通常の水位でサケが遡上  
できるのはここまでです。  
平成13年には359匹が確認されています。

平成3年10月、約110年ぶりに幾春別川にサケが遡上しました。幾春別川がかつての石炭で汚れた川から、サケが遡上するほど清流になつたことと、長い旅を終えて母なる川にサケが戻つてきたことに、多くの市民が感動しました。この感動を大切に、いつまでも継続させるために市民の間から「サケを蘇らせる会」が結成されました。この会が前身となって平成5年に「幾春別川をよくする会」が発足されました。

最初は少ない人数でしたが、いまでは市民の方々や流域の方々の賛同を得て、サケの飼育・放流をはじめ、沿岸河畔の植樹、公園づくりの公園づくりワークショップも行つてきました。放流したサケが遡上する数も、2匹だった平成3年から増え続け平成14年には466匹にもなりました。幾春別川は、河川からの取水により水位の変動が大きく、

くり、水に親しむ催しなどさまざまな活動を行っています。

「幾春別川リバーサイドチャーリング」は、幾春別川沿いを自転車で石狩川の合流点までサイクリングをして、到着後野外での炊飯や魚釣り、水遊びなどを楽しむイベントです。毎年8月7日「石狩川の日」には、川辺のゴミを拾う「クリーンアップ作戦」や、平成6年からの5カ年計画の「緑の回廊づくり」の一環で河畔林の植樹、また町内会や小学生参加の公園づくりワークショップも行つてきました。

もともと川は人間だけのものではありません。川に暮らすサケや魚、動物にとって住みやすい川が、私たちにとつても豊かな川といえるのではないのでしょうか。

## 2匹のサケが町を変えた

地質・環境などから濁りやすい川です。昔から何度も洪水を繰り返していたため、河道のショートカットや護岸が行われ、治水面では一定の効果を得られましたが、サケにとっては決して遡上しやすい川ではありませんでした。遡上が困難だった通学橋付近の堰堤や、川向頭首工に最新技術の魚道が設置されたり、河畔林が植採されるなど、サケにも人にもやさしい川に変わりつつあります。

地質・環境などから濁りやすい川です。昔から何度も洪水を繰り返していたため、河道のショートカットや護岸が行われ、治水面では一定の効果を得られましたが、サケにとっては決して遡上しやすい川ではありませんでした。遡上がりが困難だった通学橋付近の堰堤や、川向頭首工に最新技術の魚道が設置されたり、河畔林が植採されるなど、サケにも人にもやさしい川に変わりつつあります。

## 子どもたちを川へ

旧幾春別川は桂沢の山間を抜けて小さな盆地に出て、幾春別神社の前から大きく北に曲がり、山すそに沿つて南下しながら蛇行して流れています。

明治18年に開坑した幾春別炭坑は、移民の半農半鉱のための借地開発と、幌内太（旧三笠駅）からの鉄道の延長や炭坑の用地および市街地の拡充のため、明治19年に川の切り替え工事に着手しました。

がけをダイナマイトで崩した後、手掘りで作業を進め大変な難工事になりましたが、その最中の明治21年10月に夜半からの大雨があり、増水した川は作業中の堰を破つて落下し、下流と直線で結ばれてしましました。この時に出来た滝が「魚染の滝」と呼ばれ、幾春別川でも有数の名所となっていて、滝の下の水面に魚の影が映えることからこの名が付いたと言われています。

多くの治水工事を経て、今では安全な川となつた幾春別川では子どもたちを川へ戻そうと、「水辺の楽校」という取り組みが進められています。



三笠の水辺の楽校全景



三笠の水辺の楽校開校式

最近子どもたちは、川から離れてしましました。確かに川には危険な一面があります。危ないから近づくな、ではなく川は危険だと知ることが大切なことです。川は遊ぶ楽しみや自然環境を学ぶことができる貴重な生きた教材なのです。

平成13年冬に「北海道水辺の楽校サミット」が開かれました。平成9年に開校した三笠の水辺の楽校は道内では初めて、全国で

も2番目の楽校でした。水辺の楽校に一番近い小学校の教室を借りて、PTAのお母さん方にお昼ご飯を用意してもらい、冬の川で水遊び、雪遊びをしました。三笠の中学校では、幾春別川での総合学習を取り入れ、2年生は社会、3年生は未来と「幾春別川から探る郷土の姿」をテーマに実施されています。

水辺の楽校での安全管理は徹底していて、実施のときには3年ごとにレスキューの資格を取ったプロが参加しています。子供用ライフジャケット、ウツトスース、川靴、保温効果の高いドライスーツなども完備しています。少し過保護かもしませんが、北海道の川の特性を考えたことなのです。

最近発生する川の水難事故例を調べてみると、川はさまざまな危険がある自然空間だという認識がないケースが多いのです。川の流れはパワフルで止まることなく、変化に富んだ自然界のダイナミックな脈動の一部です。川に近づくには川の特性を正しく理解し、自己責任をなう姿勢が必要です。安全は誰かが面倒を見てくれるものではないのです。

## ハサンベツ里山づくり

栗山町の市街地からおよそ2km離れた夕張川支流のハサンベツ川沿いに離農跡地があります。冷蔵庫や布団などが不法投棄され、ゴミ捨て場と化していました。山に囲まれていたため規模の拡大に適さず、ヨシが生い茂る荒れ地でした。むかし18戸ほどが入植はしたもの、わずかな作物しかとれないため次々と離農していった地域です。

1985年にここに隣接する御大師山で国蝶・オオムラサキが発見されました。羽を

広げると7cmに達する青紫に輝く美しい蝶です。幼虫はエゾエノキの葉を食べ成虫は花の蜜は吸わずナラ、ニレ、クリなどの広葉樹の樹液を好みます。樹種の豊富な雑木林でしか生息できず、北海道ではごく限られた地域にしか確認されていません。

この貴重な自然の遺産を後生に守り伝えるために地元の若手経営者が立ち上がりました。それに町も呼応してハサンベツ地区の活用方法を検討しました。1999年に環境省の補助を受けて栗山町がこの地域を購入し、使い道を自然愛好者団体と話し合い、



国蝶・オオムラサキ



魚類調査風景

ません。川に微生物が増えるとそれを食べる魚も増え、鳥も集まっています。植物も豊富になります。森の恵みが里山にあふれ、川が海に森の恵みを運びます。こうして森から里、川そして海へとつながっていきます。

ハサンベツ川に設けられていた堰(落差工)を改修

して魚道をつくりた結果ウグイの群れやイバラトミヨ、スジエビが確認されました。流れが速いところは蛇行させて、両岸を小動物や植物が育ちやすいように緩やかな土の斜面にし、生息が確認された二ホンザリガニのためのせせらぎや、エゾサンショウウオの産卵池などづくりなどです。これらの多くが町の人々や町内に7つもある自然愛好者団体の人々のボランティアによるもので、中には隣接する民有地を寄贈してくれた人もいました。

川の環境が良くならないと里山は生まれ続けています。

オオムラサキの飛翔する姿に栗山の子供の姿を重ね、自然との共生をめざし、里山づくりの文化を次の世代に伝えるために活動

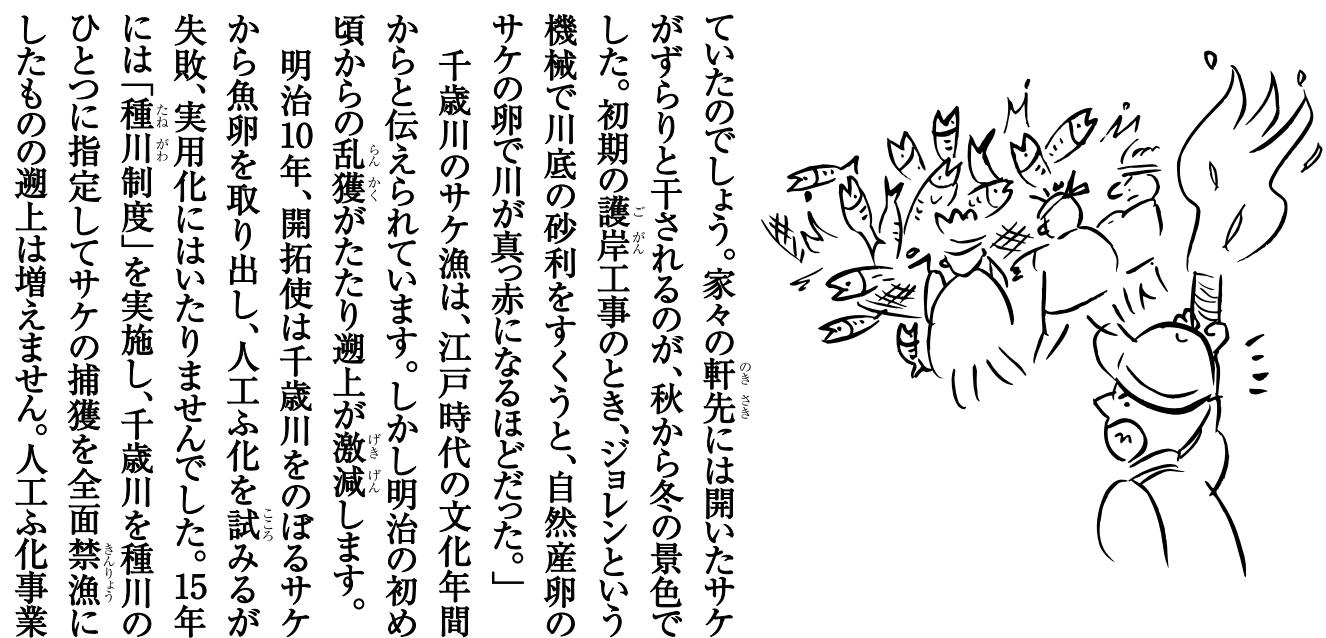
# サケが帰ってきた

清楚な水をたたえて流れる千歳川の源流は、支笏湖と思われる人が多いようですが、実は支笏湖を取り囲む峰のひとつ、フレ岳です。途中からモンルウン美笛川、美笛川、草笛川を合流して支笏湖にそそぎ、再び湖から流れ出ているのです。

平成8年、石狩川で捕獲されたサケは33万1,717尾。千歳市にある水産庁所管のさけ・ますふ化場から放流された稚魚は、2,867万8千尾。石狩川水系ではここにしかふ化場はありません。ですから石狩湾で獲れるサケも千歳川で生まれたものです。サケは、稚魚で放流されて、3万kmの壮大な海の旅を経て、4年後にまた生まれた川に帰ります。

昭和の始めころの千歳川は、「秋になるとサケがどんどん遡上し、子どもでもヤスで突破といふらでも獲れた。持ち帰ると密漁になるので叱られたが、子どもが獲るのを警察官が笑って見ていたものだ。」

「地元の人は、インディアン水車のある捕獲場から上流のサケは自分たちのものと思つ



ていたのでしょう。家々の軒先には開いたサケがずらりと干されるのが、秋から冬の景色でした。初期の護岸工事のとき、ジョレンという機械で川底の砂利をすくうと、自然産卵のサケの卵で川が真っ赤になるほどだった。」

千歳川のサケ漁は、江戸時代の文化年間からと伝えられています。しかし明治の初め頃からの乱獲がたり遡上が激減します。

は緊急の課題となりました。

アメリカの人工ふ化技術など水産事情をつぶさに調査してきて、明治21年に、河口から80kmの地点、湧き水があるウサクマイ村ルエンにふ化場を設置し、ようやくふ化事業を開始します。

事業を始めて4年が経ちました。最初に放流した稚魚が帰ってくる年です。秋が過ぎ、11月になつてもサケの姿は見えず、むなしく過ぎていきました。12月に入つて6日目、信じられないことが起きました。サケが大群となつて千歳川をのぼってきたのです。

千歳通信には、「6日の夜半、捕獲場のあたりで松明をかかげたアイヌの人たちの往来で急に騒がしくなつた。たちまち網を揚げる声が勇ましく聞こえるので、サケが上がりってきたのだと知る。」このようなおびただしき数は想像もつかない。

サケの遡上はこの日が始まりで、尾と鼻がつながるようにして来ること昼夜を問わず。10日になり、ふ化場前の川面はほとんどサケの遡上で充満するようになつた。」と記録されています。この成功で、サケのふ化事業は全道に広がつていきました。

# 上川地方最初の水力発電所

電気事業の草創期における発電所の原動機には、主として火力による蒸気機関が用いられていたが、明治末期から電力の需要が飛躍的に増加したことから、原動機には燃料のいらない水力へと転換されました。

電力需要の伸びを受けて上川地方では明治39年に旭川電燈会社が設立され、明治44年に水力発電所による動力供給を計画し、調査の結果「東川村東12号」の地を水力地点として、翌年の明治45年早々に忠別川水力発電所の建設を開始しました。山野を切り開き、道路をつくり、川から発電所まで水を引くため、道路に沿って木管を組み立て埋めなければなりません。木管の内径は人間が立つて歩ける6尺（約1.8m）、これを2,307間（約4,190m）の長さまで組み立てて埋設し、さらに石樋の長さを87間（約139m）の長さにつないで、忠別川から水を誘導して発電所の上から鉄管を通して落水させる仕組みです。水管の材料は専門家の意見に従つて、木の種類や年輪の一一定したものを見山深い森林から選びだすという大変に手間

のかかる作業でした。難工事のため、この敷設工事を請け負うものがいなかつたので、旭川の桶屋を総動員して現場で組み立てたといふエピソードもあります。

発電所用の鉄管は、1個の長さが3間（約5.4m）で直径4尺（約1.3m）という大きなもので、その運搬は、馬車2台をつないで、馬2頭、人夫4人ほどが、ぬかるみの道路を悪戦苦闘して旭川から運びました。当時は正月に新しい事業を開業するが多く、年末に工事を完了する予定でしたが、工事は遅れ、約束の期日に完了するのは不可能でした。検査の期日まで決めていたため、やむを得ず東京からの検査官を札幌の定山渓温泉に宿泊させて時間をかせぐという、笑うに笑えぬ苦肉の策も取つたそうです。

上川地方最初の水力発電所である忠別川発電所の第1号機がようやく発電を開始したのは、大正2年1月15日でした。1号機の費用は、水力工事が141,681円、発電工事が55,282円。この後、大正4年に第2期工事、9年に第3期工事が行われました。この多額の工事費のために電力の消費増大は急務でしたが、開業時の電気料金は庶



忠別川発電所の水管水路工事  
明治45年（『北海道電気事業史』所収）

民の手の届く額ではありませんでした。しかしながら会社が諸工場の蒸気エンジンの電化や家庭の電灯取り付けの勧誘に努めたことで需要は増加し、やがて料金は低廉になっていきました。

従来の火力発電に比べ、大きな発電能力の水力発電が実現したことで、電灯にしか利用できなかつた電気が動力にも使われるようになつた意義は大きく、やがて水力発電所の建設が公共工事として確立していくます。

## 空知川に魚を復活させる

むかし空知川やその支流の川には多くの魚が棲んでいました。イトウ、カジカ、ウグイ、ドジョウ、コイ、アメマスなど魚釣りをしたり、子どもたちは泳いだりしていました。開発が進み、整備されるにつれ、魚が棲みづらい環境に変わっていきました。次第に魚が減りはじめ、ついに魚を見かけなくなってしまいました。子どもたちは川から離れ、川では遊ばなくなりました。子どもたちを川に呼び戻した



ニジマスの放流



ニジマス放流会での挨拶

大きく育ち、最近では60～70cmの大型を釣り上げるという嬉しいニュースもあります。かつて除草剤などの薬剤で川が汚染されていた時期もありましたが、いまはオタマジャクシも元気に泳いでいます。

しかしこの活動を継続していくためには、財政的な厳しさ、難しさがあります。

い、川に魚を復活させて元気な川になって欲しい。そのような思いから有志が集まり、富良野市や釣り愛好家などの協力を得て「空知川に魚を育む会」が結成されました。

ニジマスの放流は富良野市の事業としてスタートし、「空知川に魚を育む会」はそのお手伝いをする形で進められました。今まで市の放流事業で36万匹、会の放流事業で約50万匹の稚魚を空知川水系の各河川に放流してきました。放流の際に稚魚の一部を小学校に寄贈して、子どもたちに育ててもらうなどの学校教育の一環としても役立てています。各河川に放流されたニジマスの稚魚は

ます。メンバーは有志の集まりでボランティアですから苦労が多いのですが、集まつた資金の中から稚魚の購入費用に充てています。試みとして単価の安い発眼卵を空知川でふ化させてみました。結果は上々で今後続けていく予定です。天然魚のふ化も実験されていて、期待しているのですが、今後はニジマスだけではなくヤマベやイトウなどの日本古来の天然魚も放流したいと願っています。

町を水害から守るために川の整備は必要なことですし、倒木がもたらす局所的な洪水発生を抑えるための河畔の伐採も仕方ない部分もあります。川岸に木がないと魚のエサとなる虫が落ちてしまません。魚道がないと産卵のために川を遡ることができません。私たちの暮らしが水害から守られ、かつ自然が失われることなく、人と自然が共生していく河川環境を目指していきたいと考えていました。

もともとこの空知川にいたイトウやアメマスやヤマメなどの天然の魚たちが戻ってきて岩陰に銀鱗を踊らせ、それを追う子どもたちの姿が空知の川に見られることを夢見て